ある経験

津守　真

私どもは予期しないときに、予想しなかったはなしをきくことがある。そんなとき、私どもは大へん貴重な経験をしたような気がするものである。

ある会合の席で、夫妻で心理学者であるパパネック博士夫妻の談話があった。パパネック博士はオーストリアのウィーンで生まれ、イェナの大学でフロイドやアドラーに精神分析を学び、また教育学を学び、後にアメリカに渡り、スクールカウンセリングなどの分野で活躍し、ニューヨーク市立大学の教授である、すぐれた教育学者、心理学者である。パパネック博士夫人は、同じくオーストリアの生まれで、イェナの大学で精神病学を学び、とくにアドラーの流れを汲む精神分析的集団心理療法の専門家である。アメリカに渡って、アドラー研究所の所長をされ、現在は精神分析的心理療法研究所の所長である。学者としてすぐれた精神病学者であるとともに、心理治療の臨床家でもある。

私は九州の西南学院で日本保育学会の折に荘司雅子氏の招聘で在日中のパパネック博士夫妻に触れる機会があり、洒脱でウィットに富んだ人柄に感心させられたことがあった。

さて、お茶の水女子大学で、松村康平氏のきもいりでこの博士夫妻を囲み、集団心理療法や精神分析的方法に関する談話会があった。いろいろ専門的な話の後、博士夫妻が、どうしてヨーロッパを去ってアメリカにくるようになったかという体験談をきくことができ、私ども日本にだけ育った者にとっては思いもよらない体験であった。卓越した専門的見識の基礎にある個人の体験として、幼児教育とも関係もあるし、この一端を紹介することは意味のあることと思う。

一九三八年、第二次世界大戦の時、パパネック博士夫妻は、ヒットラーのナチス政権下に安住することができず、追われてフランスに行った。当時、ドイツで有名なユダヤ人の迫害があり、ユダヤ人は集団収容所にいれられ、何万、何十万というユダヤ人がガス室に送られるという悲惨な状況があり、また、父母、兄弟姉妹を失ったユダヤ人の孤児の避難民が国境を越えてフランスに逃れてきた。パパネック博士夫妻は、この避難民孤児収容所の所長として、一、六〇〇人の子どもたちの責任をもたされた。爆撃、空襲下のパリで、一、六〇〇人の子どもたちの生活の世話をすることはきわめて忙しい生活であったろうと察せられる。

一九四〇年六月十日、ドイツ軍はパリに迫ったので、いよいよ博士夫妻はこの子どもたちをつれて、南フランスに逃れ

ていった。この間、博士夫妻にとって誇るに足るべきことが二つあったといわれる。その一つは、どんな爆撃空襲下であっても、毎日八時になると学校を始めたということ、これは子どもたちの気持を安定させるのに重要であると思い、また、事実、子どもたちはいつもの生活がどんな日にもあることを経験したのであった。そこには、しばしば音楽会を催し、しかもバッハ、ブラームス、ベートーベン、シューベルトというようなドイツの生んだ大作曲家の曲を選んだということであった。子どもたちは、この父母兄弟をドイツ人によって殺され、博士夫妻もドイツを追われ、今またドイツ軍に追われている時に、文化と人間には国籍を越えて共通のものがあるという信念であった。パリを逃れて、南フランスの古城にたどりついたとき、そこにはベッドもなく、ふとんもなく、テーブルも椅子もなく、コンクリートの床に眠った。その晩、一人の少年がベートーベンの第九交響曲の合唱、「あめにはみつかい、喜びうたえ」を歌いはじめ、全員が感動をもって合唱したということである。この少年は今はヨーロッパの大学の教授であるとのこと。その後、その子どもたちを、あるものはスペインに、あるものはパレスタインへと身のふりかたをきめ、博士夫妻は数百人の子どもとともにアメリカに渡った。

このユダヤ人の子どもたちには、「生き残った」という罪悪感があるが日本の場合はどうだろうかと博士は問題を出された。彼らは同じ運命の中にあの人々の中で、どうして自分だけが生き残ったのかという罪悪感をもっている。戦争が終ったとき、アメリカのある団体からこの子どもたちに慰問品を送った。その礼状の中にポーランド名の少女の名前があった。博士夫妻のある友人がポーランド生まれであり、妻子はユダヤ人収容所のガス室で殺された人であった。ところがその少女が一人生き残っていることが判明したのであるが、この少女はどうしても父親とうまく折会うことができない。父親は母や姉をすてて逃げたという憎しみがある。どうにも仕方のなかった事情を理解できない。しかしその父親に対する憎しみは、母や姉が死んだのに自分だけ生き残ったという罪悪感から出たものであった。この少女は成長して精神科のケースワーカーになっているのであるが、成長してもなおこの罪悪感を解決できないでいると。このような物語りをきくとき、私どもはそこに現代の深い傷跡をみるのである。

パパネック博士は、いま非行少年のための「少年の町」に関係しておられる。これは環境療法といわれ、この中では絶対に罰を用いない。門にも鍵をかけない。常に外に向って開かれている。そのような環境の中でこそ社会的不適応の少年たちが、社会に対する信頼を回復し、社会と協力的な関係をもつような態度を学んでいくのであると博士夫妻は強調された。

私は、幼稚園の中で、いわゆる問題児といわれている子どもが、幼稚園の集団ですする体験を思い起こしたのである。